

2010年(平成22年)3月23日

## 病院長からの一言

～高度救命救急センターの完成間近～

弘前大学医学部  
 附属病院長 花田 勝美



本院正面左側によろやく高度救命救急センターの建物が見えて参りました(写真1)。今冬の豪雪をついての大事業です。3月中の完成を目指します。開業は7月です。同時に、外来診療棟の屋上にはドクターヘリや防災ヘリ等が発着するためのヘリポートが同時進行で建設中です。本院の高度救命救急センターを成功させるためには、地域で救急を担われている各病院や地域の行政との連携が必要です。病院同士の役割分担、市民に対する救急医療の啓発活動を行うためです。昨年12月には青森県の呼びかけで「津軽地区における救急医療体制検討会」が開催

されています。ヘリポートの運行に伴う騒音に関する説明も近隣の地区にはご説明が必要です。高度救命救急センターに加えて、院内ではNICUを含めた周産母子センターの整備も進んでいます。今なお、全国的に医師不足の現状が続いています。とくに各分野の専門医が不足しています。このような中で本院に課せられた大きな使命です。この機会に、本院で専門医を育てるという意識を大学のみならず市民の皆さんも共有していただければ幸いです。さて、院内のボランティア活動は平成8年に始まり、今年度で22期生を迎え、延べ111名

を受け入れて参りました。現在は28名の方々が、患者様のために本院外来、病棟、院内図書で活動に従事していただいております。ボランティアさんのエプロン姿を外来で見かけると緊張も解け「大学病院での治療への不安や恐怖感が軽くなった。」との感謝の言葉をいただいております。ボランティア活動が500時間を超えられる

方々には表彰状をお上げしておりますが、熱心な奉仕活動に感謝の念でいっぱいです(写真2)。また、本院の院内コンサートも定番となり、入院中の皆様の癒し、職員の楽しみにもなっています。とくに「エフエム青森」は、外来診療棟開設以来、毎年、公開録音を兼ねて本院1階外来待合ホールにて有名な歌手による院内コン

サートを開催していただいております。本年は、シンガーソングライターの本間康世さん(ふきのとう元メンバー)に来院いただき、昔なつかしい「白い冬」、「春雷」、「思えば遠くへ来たもんだ」等を歌っていただきました(写真3)。春には、本院の外観も機能もガラリと変わります。ご期待下さい。(平成22年2月15日記)



▲写真2 ボランティア活動の様子



▲写真3 院内コンサート

## 各診療科の紹介 【強力化学療法室(ICTU)】

癌化学療法後の顆粒球減少症の管理の目的で、平成元年に強力化学療法室(ICTU)が1病棟2階に設置されました。平成12年4月からは、中央診療棟の新設に伴い4階に新体制のICTUが設置され、稼働を開始しました。新ICTUは造血幹細胞移植医療にも対応できる設計になっており、病棟全体がクラス10,000の無菌度を保つ構造で、その中にクラス100の完全無菌室を4つ備えています。小児を中心に、年間10例前後の造血幹細胞移植が行われています。高度の好中球減少が長期間持続すると予想される場合には、移植以外の通常の化学療法を受けている患者様も積極的に受け入れています。これまでに160回以上の造血幹細胞移植が施行されていますが、最近ICTUを利用してNEMO遺伝子異常による先天性免疫不全の造血幹細胞移植が行われ、世界

で初めて成功をおさめました。新ICTUは独立した看護体制をもち、常時少なくとも一人の看護師が無菌病棟内に勤務する体制になっています。米国疾病管理センターと日本造血幹細胞移植学会のガイドラインに準じて、ガウンやマスクの着用やサンダルの履き替え、患者様の衣類・日用品の消毒を廃止するなど、無菌管理の簡素化を推進しています。このような簡略化を行っても感染症の増加は見られていません。本院は特定機能病院であり、地域の先進医療を担っています。したがって、自家末梢血幹細胞移植などの先進的な化学療法と同種の



造血幹細胞移植は、本院が行うべき重要な医療であると考えられます。本院は非血縁者間骨髄移植と非血縁者間臍帯血移植の認定施設として、ICTUを利用して長年にわたり活発に移植医療を行ってきました。このような中で、ICTUの果たす役割は極めて重要であります。今後、ICTUをさらに充実させていきたいと考えています。

(平成22年3月1日 強力化学療法室長 小児科教授 伊藤悦朗)



▲写真1 建設中の高度救命救急センター

## 肝疾患診療連携拠点病院の指定を受けました

慢性肝炎はほとんど無症状のうち進行し、肝硬変、肝癌にいたることも多い疾患です。一方、慢性肝炎の原因の大半を占めるウイルス性肝炎については近年治療法が著しく進歩し、早期診断されれば完治も望めるようになりました。わが国のB型、C型肝炎ウイルス感染者は合わせて約300万人存在すると言われており、多くは慢性肝炎の状態であると考えられます。しかし、無症状であるため、感染していること自体を自覚していない感染者も多く、また的確な治療が施されていない患者様も多数存在するとも考えられています。

そこで、国の肝炎対策事業に基づいて、肝疾患に係る地域の医療水準の向上を図る観点から、肝炎・肝癌に関する高度な専門医療を提供することができ、県内の肝疾患の診療ネットワークの中心的な役割を担う「肝疾患診療連携拠点病院」を各都道府県に原則一か所指定することになりました。青森県においては平成21年11月18日に本院が指定を受け、これ

に伴って拠点病院の業務を遂行し、県内の肝炎対策に積極的に取り組む部署として設置されたのが肝疾患相談センターです。当センターでは相談員がウイルス肝炎に関する治療法などについて患者様、キャリア、ご家族等からの相談を受けています。また、市民公開講座の開催やウイルス肝炎に関する様々な情報や県内の医療機関に関する情報を収集し、患者様や医療機関などへ提供していきます。現在、肝疾患相談センター窓口は消化器内科・血液内科・膠原病

内科外来に併設される形をとっています。原則として事務員が電話で予約を受け、後ほど相談員(医師)が相談者に電話をする形をとっています。相談受付時間は平日8時30分から12時、13時から15時となっています。平成22年1月末現在までで20件以上の相談がセンターに寄せられています。

(消化器内科・血液内科・膠原病内科 速藤 哲)

### 肝疾患相談センター

肝疾患診療連携拠点病院の事業として、肝疾患相談センターを開設しました。専任医師を中心に、肝疾患全般についての患者さんやご家族の不安や疑問にお答えします。

☎ 受付電話番号 ☎

**0172-33-5111**

内線 4020

**【受付・相談時間】**  
 月～金曜日 8時30分～12時00分、13時00分～15時00分  
 (祝日・年末年始を除く) ※予約が5営業です。

**【受付・相談窓口案内】**  
 肝疾患相談センター(外来診療棟2階)  
 消化器・血液内科・膠原病内科 第一内科受付

弘前大学医学部附属病院肝疾患相談センター

昨年(平成21年)の4月1日に本院の事務部長として採用されてからほぼ1年が過ぎようとしている中で、今更ですが皆様初めまして事務部長の千葉でございます。簡単に自己紹介させていただきますと、私は北海道生まれの北海道育ちで、出張や観光以外で津軽海峡を渡ったことがなく、今回初めて海を渡り青森県は弘前市にありますが本院で勤務させていただくことになりました。最初は、「言葉の壁」に多少の不安がありましたが、お酒の席は別にして皆様の

おかげで普通に会話することができますことを紙面をお借りして皆様へ感謝申し上げます。昨年(平成21年)の4月26日には満開ではありませんでした、有名な弘前公園の桜を見てきました。その3日後の29日に大雪が降ったことには驚きましたが、テレビで見た雪景色の中の桜も見応えのあるものでした。また、「ねぶた祭り」に参加させていただいたこともいい思い出となりました。さて大学ではというと、創立60周年を迎える年とのことで諸

## 先憂後楽

### 弘前にきて

医学部附属病院事務部長  
千葉 博

事業等が企画・実施されようとしている時期でした。6月の記念式典において、学長が「高度救命救急センター」についても述べられておりましたが、「高度救命救急センター」は学長の長年にわたるご努力により設置が認められたもので、現在、本年7月からの本稼働に向けて急ピッチで整備が進められておりますが、その後の安定的な運営が本院にとって大きな課題となっております。関係市町村からの財政支援については、弘前市が本年度予算案に支援額を計上

するなど大きく前進している状況です。この他、NICU・GCUの増床と安定的運営、医療従事者の負担軽減と適正配置、現救急部が移転した後のスペースの有効活用策の一つとしてのICUの増床の検討など多くの課題を抱えております。花田病院長の下、微力ではございますがこれら課題に積極的に取り組んでいきたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

### 平成21年度弘前大学医学部附属病院診療奨励賞授賞式が行われる

第12回附属病院診療奨励賞授賞式が、医学部学術賞及び医学部医学科国際化教育奨励賞授賞式と共に、1月29日に医学部コミュニケーションセンターにおいて執

り行われ、受賞者に花田病院長から本賞の楯及び副賞として財団法人弘仁会から奨学寄附金が贈呈されました。今年度は診療技術賞として泌尿器科(代表 古家琢也 外

7名)の「術創トラブルを解消する皮膚縫合法の工夫—患者満足度向上と材料費削減の効果—」、病理部(代表 刀稱亀代志 外8名)の「液状細胞診(Liquid based

cytology)の導入によるがん細胞、診断精度の向上」、心のふれあい賞として医事課(代表 岡崎耕衛 外7名)の「新外来棟における季節感を演出した患者サービス」

の3主題が受賞しました。授賞式に引き続き、祝賀会が同センター内にて和やかに行われました。(総務課)

#### 術創トラブルを解消する皮膚縫合法の工夫—患者満足度向上と材料費削減の効果—

泌尿器科 古家 琢也, 橋本 安弘, 米山 高弘, 神村 典孝, 工藤 茂将, 立和田得志, 杉山 尚樹, 鈴木裕一郎

#### ○診療技術賞を受賞して

代表 泌尿器科 古家琢也

この度は、附属病院診療奨励賞診療技術賞を頂き誠に有り難うございます。この場をお借りしまして、大山教授をはじめとする泌尿器科スタッフ、ならびに2病棟5階の看護スタッフの皆様へ厚く御礼を申し上げます。

手術後の創感染は誰しもが起る術後合併症ですが、感染を引き起こすことにより、患者のQOLを著しく損なうばかりでなく在院日数の延長や医療費の増加に直結します。そのため各施設で様々な試みがなされておりますが、泌尿器科で扱う準汚染、あるいは汚染手術ではいまだ発症率が下がっていません。

また創の消毒は、消毒剤が皮膚の線維芽細胞を傷害し、かえって治癒を遅延させることも最近になって知られるようになってきました。しかし、この事実は1968年にNature誌ですでに発表されていた事を知り、儀式のように繰り返して行われてきた行為がなんの意味を持たなかったことに愕然としたのを覚えています。

これらの反省を踏まえ、当科では2005年9月から皮膚縫合をこれまでのナイロン糸による結節縫合を改め、吸収糸を用いた真皮埋没縫合に変更しました。また術後は創をガーゼで被覆するのみとし、創処置は一切行わず観察のみとしました。創感染の発生頻度は前立腺全摘術で8.5%から2.7%へ、膀胱全摘術では20%から



2%へと激減しました。膀胱全摘術の創感染の頻度は全国的には20%前後であり、当科の創感染頻度の低さは特筆すべき事項であると考えています。また、ポビドンヨード液の使用本数も激減し、月平均13.8本が1.9本となり(86.2%減少)、さらに購入費用も93.6%削減しました。

この賞を頂いたことを励みに、これからも地域医療発展のためスタッフ一同がんばって参ります。この度は誠に有り難うございました。

#### 液状細胞診(Liquid based cytology)の導入によるがん細胞、診断精度の向上

病理部 刀稱亀代志, 小島啓子, 鷲谷清忠, 水木恵美子, 赤石友子, 野崎昭浩, 三上恵美子, 鎌田義正, 鬼島 宏

#### ○診療技術賞を受賞して

代表 病理部 刀稱亀代志

この度は附属病院診療奨励賞診療技術賞を受賞させていただきました。グループを代表して、関係者の方々に心よりお礼申し上げます。

病理部では平成20年度より細胞診部門を立ち上げ、院内細胞診検査の全例を実施してきています。着実に検査件数も増え続け、平成21年度の実績予想としましては、約6,400件、標準枚数にして12,000枚となる予定でございます。検体受付から結果報告までの時間、turn around timeは平均1.06日、全国どここの施設と比べても遜色のない実績を誇っております。平成21年度より日本臨床細胞学会の認定施

設にも指定され、今後益々発展していくものと予想されます。

そのような中、細胞診におけるがん診断の精度向上の一方法として、平成21年4月より液状細胞診、liquid based cytology(LBC)という手法を導入致しました。この方法論はアメリカなどでは10年以上前から導入され、がん診断の精度向上に寄与し、実証されてきているところですが、従来法に比べ、初期投資が必要なことや1件あたりのコストがやや高いなどの理由で、日本国内での導入はなかなか進んでいないのが現状です。このような国内の状況ですが、この弘前大学医学部附属病院病理部では、全国的にもいち早くLBC法導入に向け準備を進め、また関係各位の多大なる協力もあって、現在では特に子宮頸部細胞診、尿



細胞診などの領域でルーチン業務として毎日稼働し、精度の高い細胞診断に寄与しております。また、この方法論は細胞形態診断のみならず、遺伝子学的検索にも利用できるという大きな利点もあり、今後の発展が期待されます。

最後になりますが、この精度の高い細胞診断を今後益々発展させ、患者様にとってさらに利益のあるものにするべく、病理部職員一丸となって仕事に励んで参りたいと思っております。今後ともご支援、ご指導のほど何卒よろしくお願い致します。

#### 新外来棟における季節感を演出した患者サービス

医事課 岡崎 耕衛, 日景 正彦, 奈良 正裕, 小林 陽子, 工藤 政史, 島田 裕介, 看護部 安部よし子, 中嶋 邦子

#### ○心のふれあい賞を受賞して

代表 医事課 岡崎耕衛

「あ、ヤーヤードーだ。」と目を輝かせ外来棟に向かってくる幼気な子供達。看護週間に看護師さんの献身的な看護、優しさ、思い遣りを感じているような、通路に並べられた数多くのアレンジ・フラワー、通路を通る度に花と、看護師さんのこころの美しさに暫しお気持ちを和ませる来院者。七夕飾りの短冊に、病氣回復を願う多くの望み、願いが届くようにとてつぺんに飾って下さいと頼まれ、その切実な思いを受け、脚立に乗って短冊をより高い位置に飾りつける医事課職員。

ともすれば、病気のことが気がかりで不安を抱きながら来院される患者様とご家族の皆様へ、わずかながらでも辛い心が癒されればとの思いから、時、時々の飾り付けをしたことに対し、この度このような立派な晴れがましい賞を頂きましたことは、医事課、看護部にとって、大変名誉なことと思ひ、これからもこの賞に恥じないよう、患者様との心のふれあ



いを大切にしていかなければと、その意を強くしたところです。

また、昨年末クリスマスツリーを背に行ったクリスマス院内コンサートをお聴きになった患者様からは次のような一文を頂きましたので紹介させていただきます。

「12月18日のX'masコンサートありがとうございました。オーケストラの合奏もさることながら、アンコールのソプラノの音がホールに響き渡り、美しさのあまり、寒さを感じました。毎年続けて下さればいいですね。」(12才、女性の患者様)

院内コンサートでは、開催のたびごとに患者様から感激したとお声を沢山頂戴しております。演奏者の皆様へ改めてお礼申し上げますとともに、院内コンサートの充実にも努めて参ります。

この人 No.4 本院の多方面で働くスタッフを紹介いたします。

看護部 副看護部長 安田 文子 さん

看護職員で感染対策の第一人者といえば、誰もがご存じ安田副看護部長です。国立大学附属病院感染対策協議会の教育作業部会委員長を務められ、本院の感染対策の原動力となりました。現在の職務は総務担当として看護部の広報活動に取り組んでいただいています。看護部では看護活動を看護職以外の方々にも広く伝えるために様々な広報活動を行っておりますが、その手段の一つとして看護部ホームページを作成しています。近年看護学生は、就職活動で病院探しを各病院のホームページで行っているようです。そこで、今年度は看護師確保が大命題でしたので看護学生向けにその内容の充実を図ってきました。病院ホームページから看護部ホームページにアクセスし易くなっておりますのでご覧ください。特に看護部だよりは季節や看護部行事に応じてリアルタイムに更新しています。このホームページの作成者はもちろん安田さんです。その感性の素晴らしさと表現力の豊かさや気付けられると思います。これは、看護職の観察能力の高さと人を思いやる心を兼ね備えた看護職であるからこそ出来る技であり、手作りが看護を伝えるのではないかと考えています。安田さんがカメラを片手にさりげなく院内を散策していたら、ホームページが更新されるかもしれません。どうぞその姿を見かけたら、気軽に取材に応じて頂ければ幸いです。あなたの看護活動がホームページに掲載されるかもしれません。(看護部長 砂田弘子)

### 感染症制御システムの導入

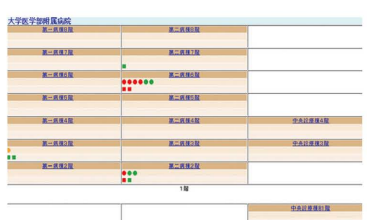
附属病院内(院内)で検出された細菌や感染症発生の動向を把握し情報を共有することは、院内感染の予防そしてまん延防止を図る上で極めて重要です。一方、感染に関連する情報の収集には多大な労力が必要とされます。そこで、このようなサーベイランス業務は、近年IT(情報技術)を利用したシステム構築が進み、多くの医療施設で感染症制御システムとして導入されています。本院でも感染制御センターと検査部との共同で、このようなシステムの構築を検討してまいりましたところ、この度平成20年度第二次補正予算措置により、情報システムと全自動細菌同定・薬剤感受性測定装置、全自動血液培養・抗酸菌培養装置等

の周辺機器を含めた、感染症制御システムとして導入が実現しました。

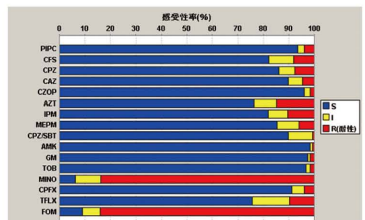
本システムの概要は、日常行われている細菌検査の結果を基に、院内情報システムから臨床検査や看護、薬剤、医事などの情報を取り入れ、感染症治療や院内感染対策に利用しやすい形に加工したものです。現在、感染制御センターのミーティングでは、本システムを活用しながら最新の感染状況の把握と解析が行われています。システムの主な機能について紹介しますと、図1.病棟をイメージしたマップ上で、耐性菌(MRSAなど)の分離状況が把握できるようになっています。図2.抗菌薬感受性パターンを菌種別、検査材

料別、診療科別に検索可能であり、初期治療における薬剤投与の際に活用できます。図3.Webを介して細菌検査の結果が参照できます。この画面では、検出された菌や抗菌薬感受性結果はもちろん、分離菌や耐性菌の解説、感染症マーカー(白血球数、CRPなど)も同時に把握することが出来ます。ぜひ本システムを有効に利用して頂き、院内感染対策および感染症診療に役立てて頂きたいと考えています。

(検査部長 保嶋 実, 文責 検査部細菌検査室 木村正彦)



▲図1. 耐性菌検出状況マップ



▲図2. 抗菌薬感受性率

Table showing bacterial test results with columns for species, antibiotic, and sensitivity percentage.

▲図3. 細菌検査結果参照画面

#### 【編集後記】

南塘だより第57号をお届けします。ご協力いただきました皆様へ御礼申し上げます。旧外来診療棟も解体が進んでいます。皆様も思い出がたくさんあり、郷愁にひたっている方もおられるのではないのでしょうか。患者様の駐車場のためにはやむを得ませんので、一日も早く環境整備されればよいと思っている今日この頃です。(広報委員 黒田義弘)

